



無視か解釈か

塚原, 東吾

(Citation)

化学, 79(12):46-47

(Issue Date)

2024-12-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495795>



無視か解釈か

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

偏見や差別を無視するような悪しき無知は、極力避けなければならないだろう。非常識になってしまっている常識を振り回すのは昭和オヤジのやることで、阿部サダヲが演じたように、かわいげやおかしみがあるうちはまだ許せるのだが、本当ならかなり悪質な毒を含んだものであったこと、また多くの人を傷つけたり抑圧したりしてきた棘のあるものであったことは、忘れてはならないだろう。ラボラトリーでの振舞いにおいても注意が必要なことだし、ある時代の常識が非常識になっていることは、ジェンダー問題を考えるとよくわかってもらえると思う。「はて」と首を傾げた女性法律家の話が朝ドラになっていたが、ある時代や特定の社会で「当たり前」と思っていることは、「当たり前ではない」ことが多い。

知ろうとしない態度

たとえば人種差別は、日本人にはあまり馴染みがないかもしれない。と書いていきなりだが、そのようないい方はすでに、在日朝鮮

人や旧日本植民地の人びと、また部落などの問題があることを無視して、それらの問題への無知を決め込んでいることになる。そしてそれらのことを、なかったものだといったわけする意図も透けて見える。

前回論じたミルズの「白人の無知」は、その社会のマジョリティによる、不都合なことを「知ろうとしない態度」とであると指摘している。これは個人の認知的な過程で差別的な偏見をもっているというだけではなく、法や制度、政策、メディア、教育など、いわば制度的・公的なシステムによって影響を受けていることでもある。それは白人男性中心的な社会構造によって維持されるものでもある。

科学という社会構造

『化学』の読者に考えておいてもらいたいのは、こういった社会構造には「科学」という制度も入っているということだ。科学は社会的な差別や偏見、さらに白人男性が中心となったようないびつな構造に対して、十分に自己反省的で、

自浄能力があったかという点、残念ながらそうでもないからである。

またこのように考えていくなれば、問題とされる主体は「白人」や「男性」に限定されないだろう。非白人の内でも、差別やステレオタイプが内面化されることは人種化された構造によって生じているし、マジョリティという意味では、「日本人」と置き換えてもよい。科学に「人種」や「ジェンダー」は関係ないかという点、そうでもない。科学は、そういったことについて、19世紀的な前提のまま営まれているケースも多い。

無知の三つの次元

ミルズのいうような「白人の無知」が取りうる形態は、無知学の観点でいうなら、個人的無知、集団的無知、構造的無知の三つの次元があると大橋一平が分析している*。最初の「個人的無知」は、「故意による無知」や「動機づけられた無知」の形態をとる。それは自分自身が無知であることに対してあえて無知であろうとする自己欺瞞を含むものだという。自己欺瞞とは厳しい言葉である。さらにこういった無知は、ある特定のコミュニティや企業などによって「集団的」に支持されて、持続可能なものとなっている。これが第二の次元「集団的無知」である。このような無知は、さらに制度的なレベルで維持・強化されると「構造的無

* 大橋は、哲学（とくに認識論）の観点から、ミルズに加えビールとブラウの文献（2006）などを検討しながら分析している。鶴田想人と筆者が編集している近刊の『無知学への招待』（明石書店）のなかでこのことについて説明を加えているので、詳細はそちらを参照されたい。

知」になる。この第三の次元になると実に強固である。個人や集団に帰責できない無知に抵抗していく責任を考えるためには、このような無知の重層的な次元が相互に強めあっていることを考慮に入れなければならない。

認識的不正義

このことをさらに進めて、ミランダ・フリッカーは「認識的不正義」という概念を提唱している¹⁾。そこには、証言的不正義と解釈的不正義があるという。

証言的不正義とは、証言のやり取りの際に相手がどれだけ信用できるかの判断に、その社会集団のメンバーについての共有されたイメージやステレオタイプが用いられることから、ネガティブなステレオタイプによって、証言のもつ信用性が割り引かれてしまうことをいう。

これは、科学史のなかに多くの例を見いだすことができる。何をいったかではなく、誰がいったかが問題になるケースだ。大学院生や助教が発見したという場合、教授や研究室のお墨付きがないとダメである。山中伸弥先生でさえ、iPS細胞発見の第一報（アナウンスメント）は研究所長の名前でだされていて、そのなかに山中先生の名前を見つけるのは難しかった。こういった証言的不正義を防ぐため、学会誌のレフリーは匿名システムをとっているのである。

解釈的不正義については、たとえば、セクシャルハラスメントという概念が生まれる以前に、セク



combustion is a process that requires oxygen, as proposed by the phlogiston theory until the late 18th century. The history of science is, in part, the history of the marginalization of scientists' battles. © Ryan Mahle Licensed under CC BY 2.0

ハラに苦しんでいた人びとのことを考えてみたい。つまり、あるきわめて不快な経験を解釈するために必要な概念上の資源が存在しないとしたらどうだろう。その被害を解釈して意味づけることができないし、もしくは加害者を訴える活動から排除されることになる。自分の被害を社会の解釈資源に反映させられないことは解釈的周縁化と呼ばれ、その結果、ある人が被害に遭っているという事実が、ほかの人たちの理解から覆い隠されてしまう。

解釈的不正義の壁

解釈的周辺化(不正義)についても、科学史のハイライトをいくつか思いだしてほしい。地動説のなところで惑星の逆行はどのよう

に説明されたのだろう。化学でいうなら、酸素という概念がラヴォアジエによって明確にでてくる前には、燃焼の理論は「フロギストン」(燃素)という元素を解釈的資源として動員していたし、熱についても熱運動説という解釈的資源がないところでは、「熱素」(カロリック)という元素が想定されていた。科学史とはいわば、無知学的にいうところの解釈的不正義が壁として立ちはだかるなかで、周縁化された科学者たちがどのように逃げ道を見いだしてきたのかという、リアル脱出ゲームのようなものだったと考えてもよいのだろう。

参考文献

1) M. フリッカー 著、佐藤邦政 監修、飯塚理恵 訳、『認識的不正義：権力は知ることの倫理にどのようなかわるのか』、勁草書房(2023)。

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化科学研究科教授、1987年東京学芸大学大学院修士課程修了、1993年医学博士(Ph.D., オランダ・ライデン大学)、＜研究テーマ＞科学史、科学哲学、STS(蘭学、化学史、気候再現など)、＜趣味＞ブラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと、淡水魚の水中観察